へ遠13
843
2

遠へ門
號 843
巻 2

春色恵乃花巻之二

江戸

第三回

狂訓亭主人著

明治三六年十月十八日

[illegible]ん此糸が深く契りし事迄の事と
いふものゝ[illegible]ねれば[illegible]此糸がとの廓へ来
らぬ[illegible]と思ひわつるもりくそまぶたぐんの
縁のことかふしのとのゆくそくも[illegible]の世の中
[illegible]ぬ[illegible]を[illegible]

めぐりて今年の秋と海く少秋色ぜ〜ありそも宝江家い
武家の種ちて正〜江戸分よりありけるが絶〜江戸の色ち
ふりて茶〜親人殊〜宮ゑる〜番場の町の庄屋ある中宮
ゑ遠とい江郷名の絵へあづけらを志ぞろく雨降〜く
庄〜ところ絶金の町の大ふ不ろくあの庄家ゑ遠の絵
へ遠〜ゑ〜親類三四人ありけるがその中ゑ十六七の
娘あり姿形容のうはくしたちとたをへられたものもあく
きとむさるもせ〜くて実ゑ絶世の美人ありとの節

宝江家い二十三才の宝世風の息子ゑく加ゑ志ぬく
容体ありしたがひこ思ひ内ゑあまどもたゑ思ぶ
ちゆて弓せ〜ゑ親とた家門い不残絶行かの娘お永
といふものと宝江家のこそ留ゑ居氏あせりその日ち
夕方より大雨あく嵐のごとく降りまべ出行〜ぞも
ゑ方ゑ弟ぶ主人ゑ遠ゑ人かくらぶる　世ゑ郭門通る
人ゑ主傷ちゆ〜り夜ゑいまべ雨ちいよく大げ〜く稲
方ゑけまべ宝江家い表の庄ヶより主宝家西港方の

あまどよりハ戸成おゝ要紙よく念入まてく雑巾よいこ
見べ被寝も傍ゑ傍ゑ家内まぶく家ゑぶゝ
を行きあんどゝとゝゝ油を被ゑ玉へ宝寿のやう
くとまた洗ひ拭あゝゝちく来ち振きゝ第頼
ちく 糸へまことふ三ツく傍ゑ被せんゝぶゝ
ゝゝちゝとゝぞんゞまんヨ 糸へイヤ 出ゝ被けゝ宝寿を
させゝまゝるのゞゝゝあゝゞひふ大まゞゝ被さ やゝくのゝ
を洗方をメイ来まひ中ゝゝトキニ戸 大ゝゝゝ はよい路

ゞよへ 糸へまゝとふこゝはいやうでゞゞいまんヨ 糸へ何ろ怪物
でゝ来るのでゞゞのやせうゝ戸ゞゞゝも仕方ゞあゝゝ
今夜ハ来ゑく寝るゑうゞよゝゝゝとゝゝ不ゞ自ゞく
ま此方の雇ゝ紀と来方のゞゝ紀人ゞ寝るのゞ
ゝゝゞゝゝおゝ乳味ゞゝりのやうゞゝトあゝ紀ゝまま
ハをお糸も史弥のそばへ来ゝよりゞゝ身をぶゝく
とふゝゝゝ 糸へわんよ来の振ゑ度い宅い人がすけるい
と隅くゞ看ゝるようゞゞこゝゝゞゞいヨ 糸へさゝゝさ

そーく湯釜の中とちがいく古い茅ぶり田舎ごろ
人ぶきけまいと亜ょ狐や猩ぐつけ西で出るく来ー
まと同家ふい和の蒙や眼の念あぶろ立ーく見るく
ちると逃夫ぶんぞろ出てさぐるのぶろーまものとふ モウそ
見ぶ不ぐさねトさを乳味見るそうるいふ糸ーヤーく乳
味の見るい実西でぐざいまするく ま一ナニ大ぜい人ぶ居る
と行のるもまいが さこーい陰乳る亜へつけさんで出る
ろうまるのさト まぶ見ょいもまるく 眼をねどーく ゆる

ろよ 蒼中のかぶ洗見ふ人てりて 糸ーチャ今あふろ奥の方
で ちぶ いこーまーーョトいふ麺のろあどけちく を
かーるあろーー生活弟ハ見ぶざと角を編ん ま一エ ちぶ ちさ
ちんアーいやぶーく 糸どろいこーーこうー宜ぐざいませう
れく ま一ち狐さぶろも ちかさが あいろーー アア 乳ぶん
さまでも 伝ぶーて 居るより 乳い 仕狐も あんのサイヤ
行ぶろ見まれ さと見ろーーろ 疲食をまぶ 洗るいやいさ
糸一ぶんよ 孫く 兩のさるとぶ ちるんのでお服のことも

ゴすまさく　居まゝ　こゝ　そゝく　何ガ　何ボよ　ございません
う　私ども　知れません　けれども　ア　お屋敷　へ　まいつく　お稽
の道具を　たづねて　来ります　せう　ド　ゴ　ても　往く
る　何ひや　せう　ナニ　何でも　かまうぞ　ゴ　ぞり出して　やう
うものサ　どうも　仕方ガ　ねへ　来ヘ　ヤホ　親父さんや　何
う　ア　ゴ　ア　さつ　ました　ら　ません　来ヘ　ナニ　かまつ　のう
ちゴいう　夜通　ー　知く　居ると　来ヘ　何も　角を　吟く
ちゴいう　ことい　ひやセト　苦めるガ　二人して　揃ふの　方へ

由に　猪豪　碗　その　ア　飯茶　の　ふく　をつぐ　いづ
ゆつ　く　と　雑　ざく　遅び　茶式　ゴ　ちゃ　瓶　よい　を
糸　へ　ゴ　く　く　ハ　よんが　ゆ　さん　の　ゆづる　ものガ　あい　う
ゴ　ふ　ござ　ハ　ます　よへ　ま　ヘ　ナニ　ぞう　も　ちつ　ガ　ア　ヘ　ど　を　ト
いひつく　蓋物　を　ゴ　殘　あけく　ま　ヘ　ま　く　殘　ハ　味　ゆ　を　雑
禪　ゴ　梅干　ありや　ア　あんど　塩　梅　の　ます　びと　二　荒　ち　う
ぐ　く　ち　ま　ま　ゴ　金　ア　寺　や　ガ　茶式　ろ　く　ち　ゆ　ぐ　来ヘ　ア　茶
そ　ま　ゴ　も　納　ま　ハ　ま　ん　ヨ　ま　ヘ　イヤ　ゴ　ま　ハ　何　ろ　の　お　ガ

夜よ
雨夜の
怪談
月老よ
代々の

げ　ゆるゝ〳〵　糸へまゝ　母さんの　お東げ　わるゝ〳〵　それ式
ま　おゝ　私　ゆさんまゝ　ま　こゝへ　あげゝ〳〵　あまま
への方よ　あるのゞゝ　どうも　ちゝ　げれへ　糸へまゝ　私の方
ま　ゝ　何も　お茶を　隠ゝ　持てゝ　をりません　ま　イエ　沢山
ありやを　糸へ　何　ゆさん　ま　コレ　ちゝふ　ありやを　何ゝ　良味
電敷　をゆゝ　お出ぎやア　あいゝ　ゝ　ゝ　ゝ　そのかゝ　ゝ
かる式　足　あげゝ　お　後　茶　たべ　べ　肩　焼　ゆ　ゝ　もゝ
私　おさん　い　気　陳　ごゝ　今夜　だかり　雑文　紹　たべ

て　ゆゝ　此　私　ゆ　ゝ　ゝ　糸　と　あゝ　ゝ　ト　あゝ　式　ふゝ　んで
ま　ゆゝ　ま　ゆ　ふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
糸へ　母さん　と　そ　その　人　電　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
の方で　逢　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
電話　帯の　茶碗へ　茶式　ゝ　糸へ　サア　お　茶式　かけ　ま　ゝ　ゝ　ゝ
ま　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
もゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

好かとく〳〵「さあうサ　あいつときんといふ海ととまく　かうこへ
らーい娘ごサ　ちらーしもすびも　紙へまとこぶ　此娘をとこ成
いんくこ乳薄ぐ〳〵まるよりわきこうめくきやく　物まんまを
結て　ちまつ〳〵ト　いんどを　娘を　心のうちあんと　めいさつー
てよんや〳〵きまこちぐさこのぎうぐんよりあや〳〵　ちれぬ男
の心あまぐのあるあるすもくこさげ　ちまるまんもちかう〳〵
まべと用心ちまとどを　物心うあよやつハまを　物とちく
海鼠をつくそのやまんざ〳〵であれ　あの情貞ちとれ
てやぢ　心のうちよ　娘ごまさうふ　多出ーもあ〳〵
ざまべ　ちまま　逢ぎまくさー　西ひやりく　金本や　ちこ
けるが　雨へ　濡こふ　ぢまくちり　孔欠　めれてすこまうーく　函
ど　戸よ　賞り　独色の　ちあどこをあこー　薄の　苦も　ちを　近ず
てのすどくこうー　紙こちらこ　汗ぬり　濡ぐ　紙ちふ　拾こる
癌　紙心よ　紙成ちー　百物　紙こよ　わこ　拾ども　庵ぐろめ
ちを　ぢ　心紙弟い　化物　ちふ　ーの　実　娘ちーーき成　二ッ三ッ　ぢ　かぐふ
まべ　ちを　子刻の　薄ぢこのえ　ちるが　為けまと　娘乳の　ちうこさ

よ絵兼男子もりひ「まさえ」や　ちゃ　ち
さん　彩の家も　ちゃ　ゆとさんきーヨ　ま「ぞうぞ　そう　ーて
おくんあせ人　ぐろう　ち　乳　傍ゲうりい　「ひ」サ　そんあるの紙
おくちぐちあいぐんくちうくちうちんくちトのみがう　四　ま
の小　寿　安　二ヤの　家紙　ちひ　ちまども　中紙　蒲　ちーー　ちひ　川
りちうちふ　舟の　拵　ちうん　海の　ゆ　せあく　寝　物ゲうま
も二人ゲ　月の　今　月　ちうーーべ　いうたあり　様　ーうんと　影　ーの
中ま　いうどま　ちうん　ちうちの　綾　帰の　家よ　ゆ　ーー　拵ども

ゆ　ま　同志の　義　員　家　ちうーー　紙　一間　あり　さく　寝　紙　家の
小　用ま　往　く　わどなく　ゆ　ちう　家の　うち　「ま」　さ　ものく　ドレ
ちまちうう　編　ちまって　寝　ま　ちう　絵　方ゲ　あへト　服ゲ　ま　ーく
いふ　此　時の　ちや　中　夜　ふけて　風の　ちうづう　ちうふ　ちまど
あ　ちう　洗　ちふ　彩の　洗　ち　ちうさん　すごくあの　彩　ーく　本や
も　稲　ふ　ちと　たと　ちん　ちる　牛　満　どう　ふや　ありぬ　ちうん　乳　傍　ま
ちけ　ま　べ　ちと　ちよ　かく　ちよ　前　後　ちんま　ーま　夜　ちの　紐　前　ちうま
かみー　杉　帯　ちま　お　ちう　ちん　ま　次の　ちの　備の　陸　ちう

ありくとうまる大陰とあろとあふ繋ふり乳せし女の
出見お弟いはんとよりワルトだかり一緒へとて茅戸よりの
茅ぐてくまうけし茅戸が夜具の中へ逃こければ
茅戸もおそろく風情裏紙ころして二人とも夜具
引かぶりくゆく者を傍あるく体ろけるゆく
ありて茅戸はお弟にむひまへとろとろ
アレサ口をおきるさいまするまぐ寝るも知まませんよと
男よまぐ身てふうん体まへナニサ めう燭へ火ぐ移うと

うう出見いのえく者まうこうへ糸へ中ナ糸へ中うまいろのえこへ
ふふふ 正体とんせ中うへとト陸ゑ戒めまべ女燭よとも
せ燭の傍ふふよある化物ろうそくの袋をろく
そまに出絵ぐろ中座でうる泉目出ぐ彩ふ更あんとうま
い細ぐぐらう糸へまふ彩へまくんろうよ出見ろと
ふいくぐんあよ腰戒法法ふふふ とトかうこレ
そでうりぐぐ出絵ろるれへ出絵よ狗ぐ新乳ぐ者まんヨト
男のくぐうかあそて中へ ろんこのへ塩見ふふ
うぐれをおうせる

第四回

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そうまとぬ乳若男をさそなるいなのいづこぞ高塚ちくべ神
力ゆて和睦の出来ぬやうなその用心とそ頼ハしけな
嘆あよとせんまくあ〜れえこの世界そ是非をいよ道理の
たえくあたこと〜お糸ハ中ほ命が名残惜そくちそ
いつまぐもたるさバこそ心の中の名ハ残あつもうあり
いとわそそ指よいくまる情の涙男も恋ひと恋かそ
多毎多くぐのこうぐそハ言ふもいくぬ底の秘事ゆ
ふーの色うむくさその東雲ちかく雨山まぐたぐひふ
病むくぬ涙と張ひしあこそたのくこの格そとはひ
やくまけるかくはすを両個とも薄命ることのかさ
ありく生れ命ハちぐくく田舎人漁泊お糸と唐琴
屋人男をくくく此糸とのくあらんまハありーるうそれ
よりたるうの月日もこちそたぐひよ月すくくとふるふ
いわく稲どあうまぬ中うとなきくくめてるひ縁ーのかふ
ーくも弟つくくくも浮勇め全生きるるどぬのるに
ひづひもいとあそそ廓のあくひう此糸がちぐのもも

他任せられぬ若衆の夜ふけ世ごろ冷の寒ひびく表に
階子をかくして出一人りの男ちの風情わかぬ新
造糸花ゞせるぐーくと歩り花へおのゝんエ花へうん
ざいまん花アノウ今吉田屋の宅うゝ寄よりまいりイーゝと
うゝつまと中みとうそ中りまーゝぶよ人ちろ走作者曰花ぞろの一春ぞ第屋へ
あのちろせいいゝとる是ぞとれ世ちを
とろやをぞゝゝゝおりひかれがうり
なまーゝる山形よ長さいぞ居つもりの花へまさ左様ぶい
まゝちろるいるをいゝーイまさわくそをだやアことろりイ

ちやうこ　あのいとふ花へ廿二よふぶのまん左様まるとまゝ此
川さんゞ嵩さんの　かぶのかぶのとゆイまとろゝふ花へ
此川さんい今麻ざいまちゝゝ　かもちろい花イ宣そーて
星風さんぞゝゝ美中で居まんショトいふぶゝ川の　花様
ざまんちそまでもアア吉田屋の宅へ日ろいゝゝ踊りイも
まいヨト　かのぶとも宅ゝ居ゞちる男の行ひ如意順女
も　まゝ女も　宅　踊ふろ　かのぞゝーかるちろあ花草紙
ちぞ紙ゝもよつけても　紙を男ひ巻中ある人物の吉

處女の
運命
畑の花よ
僥倖を

延年賀

ゆ
あるをうらあるよあしー常の行ふる所情ーこまやかで客
人とあるのこころへ自然と光も沙くべーそまえさく並
此あい西成主ーく主ー度する所へ此やど居住けー
ーく今かくてまこる客人のまこ途中うう引かくー時び
きてる大生稱まこよ毎時ども主稱る辱処いびう多
根生悪者ことど蒙昏よちうざあい住き出ぢうの
客人まく洪平を世話ーて金の面ちうまーこる
不人不病ちよさうりーゆうめうりちうーく此糸を

側へ引ふ世たまさびこそんぢの民巻舌すうりよ元
きく美いの半ゆ成ーしめ初の住い世ふ主年一
う大主の感光を住ぐるも面側ふまべ看官ようーく
案ーゆくこまよ引かえ神金ふまく古の多へ来主ー右
田屋の客へさこーた生へーの産業乳のどくちうよ彩選
糸義「ゆ」へ神の右ぎ成此ちうよまこお見ゆを分主
あんはんうーおみうんがぞんあよ乳成りんで居ふ高ちる
初ことませんけまど 作者曰ちどろさとちとだとちろうこの 縁よゆい

ゆくてをうしなひもあんまりおもしろくて
けんぶつをあるよ地のおやうんを呼あるまいせんの隆分ほうの
ゆもいく如帝氣が居イまうう　第ナラ〳〵いろるあるべき長
氣のどくがる祝す移へ古へ来ると者よさ一会の出来さ
ので高屋も氣をのんでその紙をけまど少絆
此方より簡がめいく自物らひがきざおやうんと
面もたれへのよ名代でいう〳〵間ケあつさべちよりと近
付よあれべいく毛丑も写がコろけりやア再ぶ来てあいか
と和ようう義和のまいく紙屋かのうぞ氣を洗うはぞと
いよあるもかまへぞ往く寝ゐまろー今吉田御ぶいひ
付く毛さの紙何う持て来るこちう毛丑紙えべく
うう寝ることあそびよ往ととーみトかさーくいべ新
造糸氣まべちべも有氣る見ど男もおどるよ氣
のこう住切らし氣吉ふの指子白紙あべて形うーぶ
何ぞひろん毛あべり毛へちよと往くまいライとあハうう
らうかへ毛丑ー此糸が庭ーたよいろく着べ新毛

つまくゆうくよ彼岸だけの生酔客が寝入りーとなりて
まそ志ばらよ志ゝー変も笑えねべよりく伺ひ彩遣糸
死陸奥の外より小変よ志ゝ変りえへおみゝんへくトいんど
恵ゝ多もまさねが寝入るエーー客よ紛ゝせどと公づくひの
ゆ名あゝんとまのゝまゝうゝーんへネめば業よ志ゝ此糸
ぶそのと糸のゞ糸も志ばゝ志ゝー風の和ゆへ糸
死志えゝくトいのゝくらゝゝ久出こゝも少変よ吉田屋の
あゝんべどういてイーー

くあるエイ甘んの小結よ安ゝーく伺ゝ紙乱とうけるんを
ゝゝ伺ゝゝ怒ーくゝ安エイーゝそーそどうもものかをも
いまゝべいあゝーゝとゝく男ぶりゝゝ乱ゞその格ゞまと
ゝよ姉さ客人ゞまんゝゝあゝゝんみよゝとゞ世ャんゝゝと
出ひイーくちよゝと久出ーそまのエイーゝとのゞぶいまん
ゆ八ャ志ゝゝーの形ゝゝまゝ吉田屋のゞらゝゆうみゝとけ紙

つけく くまさーそだまろ ぜーてくまるまーくろまさ 他人で
も 往るまーさのうと 出けく 居イーぶそまるのてい 来死
さんぐちまろとも 産ーぶ人 面を 出きろ 手ろ 極人のいどう
あんーうろと 考へく 居イーさ 西人 呼るまー まろうそろと 出
てまのまイーさ そまぶまさろまー まいあくとま 飛ろまぶ
ろまろ 来てく 来て 何ざの 角 ざのとむづーく 振 古ぶふ
とまぶりいく まナ ぶ きうぎまんうらもく 面ぶ ゆくう
あろをれく ぶ ぶぐまろぶ ちまのと 吉田春の人 往ないまーあ

ぶ〳〵 赤紙いーいまろト 表紙を 洗くろひーぶ ぶ〳〵 き ん
改て 出イ まやうう ぶ 十三 そまま でまふぎまんふ ぶ〳〵 そまま
ちゃ 改を 乳をつけくくまるまー ト 行まかるまろ引
とあて 来ぶ ぶ〳〵 ちゆろん ぶ〳〵 あんぎまん ぶ まよひ
なん まあく ふろ 程 好男ざまんョ ぶ〳〵 花かろーい 和尚の
人ざまん 平 程る 薬 浸ーどゃ あろ せんョト 第ひ ちぶーう
らう 下戦 ぎろく 剃まあく 形 帯 奥の 足通ーま 一座も
多ん 振ーき 吟夏の 好ろう 来ハとりよ 宅 男女の ちろ

ふく

上ろう「そつれどげんかをしてこさ女く藤くもやのよ
ゆくさづ成一座のまくもあんのそのあもと
あぶらいまよと海くよーしてこてろぞ女ぶあ
国のを兒 下畧
笑くよ笑ゆる浄瑠璃もとと世系の性ぢ合ても知ろ
結と彩造系兒ゲ好く男と一云のうこきもとてろふ
たのもーく女ぶく一間をさー那兒どりくりあどろく角の

うちちや濱ぐむ女の情おりひ軋海くなりまり
こまりより一間よ入は さるハ次の五回よ入ーく
ちろん

春色惠の花巻之二終